

俺の／僕の／彼女は猫  
耳／犬耳！！

ヨーグルト先生

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人間を好きになれない主人公に1人の子が告白をした。その告白は成功。そしてその後の物語―― 猫ヒロイン 人間嫌い主人公

自殺を図ろうとしていた。1人の少女その自殺を止める主人公。時間たち、主人公は自殺少女に告白、告白は成功！ そしてその後の物語―― 犬ヒロイン 人気者主人公

# 目次

1章	2人の出会い	
1話	『彼女が猫少女でもいいですよね?』	1
2話	『どこの日常もこんなものだろう』	5
3話	『自殺少女に出会ったらどうしますか?』	12
4話	『甘えたい時だってあるのです!』	17
5話	『彼女の苦手なものがまた増えましたあー!』	24
6話	『帰宅』	34
2章	私の事好き?	
7話	『出会い』	38
8話	『会話』	43



## 1章 2人の出会い

## 1話 『彼女が猫少女でもいいですよ？』

ミンミンミンと蝉の鳴き声。

うるさいが生きている限りしょうが無い。

俺は彼女に言っただけは無く、こう呟いた。

「蝉うるさい」

彼女は反応し答えをくれる。

「それじゃ人間はもつとうるさいよ？」

言われてみればそうだ。蝉より人間の方はうるさい、それに俺達は人間はうるさいに加え、わがままで。

蝉にうるさい！ でも俺達はうるさくしてもいいと言うと定義は違う気がする。いや違う。

「そうだな、間違ってるのは俺達の方かも知れない」

「って何を語ってるだろうねー……」

彼女は「くすくす」と笑い俺の名前を呼ぶ。

「ねえ、達哉たつや私は達哉の事が好き!」

「いきなりだな、数週間前に告白されたばかりだから余りドキツとはこないけど、それと……俺もお前の事が好きだよ、莉音りおん」

俺の彼女西雪にしゆき 莉音りおんは8月18日夏休みも終わりに近づいてきた頃に告白してきた。

人を余り好きになれない俺がこの子を好きになった理由は凄く単純だ。笑われるかもしれないがこの子の笑顔が可愛いのだ。

それに、優しい。俺はそれ以外にも好きなたがメインで言うところだろう。それとこの子、莉音は病気を持っている。病気の名は、『毛耳動物人間細胞障病』と言う病気だ。

この病気は、名前の通りだが動物の形を少し取り入れてしまう、と言う病気だ。

俺の彼女は、両耳に猫の耳、背中の下あたりには尻尾が生えていてる。1日3回は薬を飲まないといけない。

飲まないと体が弱ってしまい1人では動けない体になってしまい、終いには死んでしまうこともある。

莉音とは学校が一緒なので少し気になってし調べたことがあった。

調べれば調べるほどに少しづつ怖くなってしまった。俺はそれを支えたいとも思い

告白を受け入れた。

「おーい!!! 聞いてる? 達哉!」

「うわあ!」

俺は突然の声にびつくりし、心の底から声が出た。

「何だよ! ビックリさせるなよ……」

「達哉が返事してくれないんだもん! 何回も声かけたんだよ?」

気づかなかつた。1回集中してしまうと、話を掛けられるまでその事を考えてしま  
う、俺の悪い癖だ。

「全く! 達哉の悪いところだよ!」

「分かっているって」

「分かっている!」

こんなやり取りをしてるうちに窓の外の明かりは段々と暗くなっていった。俺達は  
2人で住んでいる。

別に2人の両親がいない訳では無い、しっかりと2人とも居る。

その両親に同居の許可を貰い、2人で暮らしている。莉音のお父さんは、「もしかした  
ら、莉音も特別な人と一緒にいたら病気のことも忘れられるかもれない……よろしく  
頼むよ! 達哉君」

と言われた。

俺の母さんも「無茶はするなよ!」とだけ言い許してくれた。

「ご飯食べよ! 達哉!」

「そうだな」

俺達の生活はこれから始まろうとしている。



## 2話 『どこの日常もこんなもんだらう』

「ごちそうさまでした！」

「じゃあ、薬飲もうか」

シューーン

物凄い勢いで莉音は自室へ戻った。

そう、莉音は大の薬嫌いなのだ。

莉音は部屋のドアを少し開けこちらを見ている。

「おーい、出てこーい〜！、薬飲んでくれ……」

すると莉音は頬を赤めて俺にこう言ってくる。

「じゃあ、いつもの様に口移しで飲ませて……」

「結局そうなるのか」

「そうしないと飲まないいいい！」

ぐツ…… 仕方がない、飲んで貰わなきゃ困るし、

「分かったからこっち来てくれ」

「わーい！ 達哉大好き！」

何故だろうか？　こういう所まで可愛いと思つてしまふ。

重症？　いや、ただ『好き』と言うだけだらう。

「じゃあ、は、始めるぞ」

「う、うん」

なんと言うか慣れないな、でももう口移しで薬を飲ませるのは毎日何だよな……い  
い加減なれないと……？　いや待てよ、

莉音が薬を飲めるようになればいいじゃないか！　今何歳だよ！　そんなことを思い  
つつ俺は薬を口の中に入れる。

そのまま莉音の唇に持つていく。莉音の唇は柔らかく、とても温かかった。

「ん……あつ」

莉音の変な声が出つつ何とか薬を莉音の口の中に運んだ。そのまま俺は優しく、莉音  
にキスをした。

「うくん、ありがたいと」

「ありがたいのか？　まあ、段々と飲めるようにしていけばいいか……」

しておいてから言うのはあれだけど、少し恥ずかしい。

さてとー

「莉音、少しコンビニへ行ってくる」

「本当は」

「風呂に……」

「じゃあ、私も行くー」

俺が風呂に行くと言うと大体はこうなる。

何故一緒に入るかと言うとー

「1人で入ってくれ」

「だって濡れちゃうんだもん」

「今何歳？」

「16だけど？ 何？」

莉音は尻尾を左右に動かし、ご機嫌そうにこちらを見ている。俺が駄目だと言うと、猫耳を垂らして「達哉と一緒にいいっ……」と涙目でこちらに問いかけるように言う。俺な子に弱く、つついと言ってしまう。

「分かったよ、じゃあ、一緒に入る」

まるで妹かペットが居るよな気持ちだ。

莉音はルンルンと鼻歌交じりに風呂場に行く。

俺も行くか。

風呂場へ行くと莉音はもう、風呂に入って「早くー！ 達哉も来てー！ー！」一人で

入れるじゃんと思いつつ俺は服を洗濯機の中に入れ、風呂場のドアを開ける。

「遅いよー!」

「それより、お前1人で入れるんじゃないのか?」

「ツ…… ハイレナイヨ」

何故棒読み? 絶対1人で入れるな、次は1人で入らせてみよう。

「はいはい」

「それより、背中流して!」

「それくらい自分で出来るだろ」

「達哉にやってほしい」

莉音は俺に洗い道具を渡し背中を向けた。

白い肌が目に映る。白くて綺麗だ。頭から尻尾にかけてまで綺麗だ。

「その前に頭洗うぞ」

「ラジャー」

俺は長い黒い髪をわしゃわしゃさせる。

「気持ちいい」

「それは良かった」

一通り洗い終わると、水で流した。莉音は体もやってねくと可愛い顔で言ってくる。

やるしかないか。

泡をゴシゴシ立て背中を洗う。落ち着くなあ。

落ち着くな!!? 自分の言った言葉に驚いてしまった。

何を言っているのだろうか。

「前は自分で洗ってくれ」

「えー、洗ってよー」

「自分で洗え……」

莉音は「仕方がない」と言って洗い出す。

じゃあ、俺は先入るか。

「えー、汚いよ! 洗ってから入ってよ!」

「じゃあ、そこをどいていただけかな?」

「待って流すから」

流し終わり、俺は体を洗った。流石に、莉音が俺の背中を流すという訳ではないか……

俺も洗い終わると莉音の隣に入る。風呂場は余り大きいとは言えないが小さとも言えない。2人何とか入る位の大きさだ。

「温かい」

「風呂だからな」

「達哉と居ると…だよ…」

莉音の頬は少し赤かった。風呂のせいだろうか？

「何言ってるだ…」

「さあ！ 出よー」

気まぐれのやつだな…

莉音は出たら

「髪の毛拭いて！」

俺は承知しないうちに莉音の髪の毛を拭く。

これも日常化となってきた。

風呂を出るとー

「ふあく眠い」

「寝るか、おやすみ」

「は、早いよ」

「夜更しはいけない」

「そうだね」

前に遅くまで起きていたことがあり、授業中寝てしまうということが発生した。評価

も下げられたから痛かったんだよな……。

「じゃあ、おやすみのちゅーして！」

莉音はいつも寝る時に言ってくる。大概はこう返すけど。

「分かった」

口移しの時は薬を入れるが目的だったが、今回はちゃんとしつかりとした。キスだ。

「ん……あ……」

息が続かず途切れてしまう。

それでも、莉音は満足したようである。

「明日も頑張ろ！ おやすみ、達哉」

「うん、おやすみ、莉音」

こうして俺と彼女が過ごした時間はまた一日と過ぎて行った。

## 3話 『自殺少女に出会ったらどうしますか?』

僕は今日の前に起こっている。現状を目のあたりにして  
凄くビックリしている。何故なら……

「ちよつと、待つてえええー!!」

犬の少女が自殺を図ろうとしている。

僕は叫ぶと同時に少女の部屋にかけつけた。

そこには、今にも飛び降りそうな彼女の姿があった。

彼女姿は犬耳が垂れていて、尻尾はしたえと下がっていた。

「な、何してるの?」

「死のうとしているの、それに貴方勝手に人の家に上がりこまないでくれる?」

彼女冷たく僕に言った。

「上がりこまないでつて……今から死のうとしている子をのうのうと見てるなんて出

来ない」

「自分の前で人が死ぬところなんて見たくないつてこと?」

嫌味を言うかのように聴いてくる。



「そうじゃない…。取り合えず何で自殺なんてしようとしていたの?」

僕は落ち着かせようと、訳を聴く事にした。

少しは気が紛れると思った。

「理由…。そんな聞いてどうするの?」

僕は少しだけ、彼女が落ち着いた気がしたので、会話をすることにした。

「解決できる、問題なら解決する」

僕は勢いで言っしまった。後悔はしていないと思う。

「解決できる? ふざけないで! 絶対に無理!」

「言うだけ言ってみてよ、言わないままじゃ、何も変わらないからさ」

彼女は嫌々だが話してくれた。

「ねえ、あんた『毛耳動物人間細胞障病』って知ってる」

「何となくだけど知っているよ」

僕は今学校でその勉強をしている途中だった。

内容はそんな詳しくは知らないが、色々な種類の動物のDNAを人間のDNA配列にある事がある。見たいな感じだった気がする。

「私は、それで苦しい」

「苦しい?」

「貴方に分かる? 世間では差別され誰にも愛されない私の気持ちを! ?」

僕は何も言えなかった。いや、返す言葉が見つからなかった。

「ほらね、何も分からない、解決なんて出来ないんだよ!」

彼女は手を上下に動かし、今までにない顔して言ってきた。僕に出来ること? それは何? この子にしてあげられ事。

彼女がまた降りようとした時、僕はその答えを導き出した。彼女の方に行く。

「来ないで! ……あつ……」

彼女は、足を踏み外し、ベランダから落ちる瞬間だった。

「あ……ぶなかつた」

僕は何とか間に合い手を掴んだ。

「死にさせはしないよ」

「なに、言ってるの?」

僕は彼女を引き上げ。抱きしめこう言う。

「僕が君を支える、だから安心してくれないかな?」

「はっ?」

「これは、告白と言っているのだろうか?」

「それって貴方が私のー」

「そ、そうだよ！」

僕は少し動揺しながら答える。

「駄目かな？」

「まだ、信じられない所は色々あるけど、それはこれから先明かしてけば良いよね……」  
告白は成功したのかな？

―数週間後―

「羽織はおり今日のご飯何？」

尻尾を左右に振りながらご機嫌そうに聴いてくる。

「今日は定番だけどハンバーグを作ったよ」

「ええー！ 羽織が作る、ハンバーグ大体生か焦げてるからなく」

おっしゃる通りです。

僕は数週間前、自殺をしようとしていた。彼女―星海ほしみ 結ゆいを助けて、告白した。告白は何とか成功。人生で告白なんて事はした事が無かったので多少緊張した。僕の初めがあんな感じで始まるとは思いもしなかった。多分それは結も一緒か。

「しようがない、私も手伝おう」

「はは……助かります」

これから先も僕達は幸せに暮らしていけたらと思う。

## 4話 『甘えたい時だってあるのです!』

窓から太陽の光が差し込む。

起き上がると、まだ結は気持ちよさそうに寝ていた。

僕もまだ寝ていたいのが、今日は月曜日つまりは……

「だるーい、羽織いー、帰りたーい」

「そう言わず、今日も授業受けなつて」

僕は机で突つ伏している彼女に言う。

僕達は専門学校に通っている。将来はそのような仕事につきたいと思っているからだ。結もこの学校に通っていたのだが、いじめ……差別が原因でやめてしまった。僕はまだ、その頃の結は知らなかった。噂にも聞かなかつた。その時に築いて上げていれば、苦しい思いもしなかつたのかもしれない……

「おーい羽織いー?」

「ツ……どうした?」

「いや、羽織ボーとしてるなーと思って、最近何かあつた?」

「うっ…： 特に何も無いよ…： 疲れた溜まつてるのかな」

僕は愛想のない笑い方をすると、僕の隣に座っていた。

桜葉さくらば 玲奈れいなは「疲れた時は甘い物食べるといいって言うよ」って言って笑う。僕はこの笑顔が好きだ。僕はこの子が好きだった。過去形と言うのはそれより好きな人が、頼りない人をいや、言い方が悪いか、守りたい人が出来たからかな？…：

「こーら！ 羽織くん？ HR始まつてるわよ？ 廊下に立ってなさいとは言わないから体調管理はしっかりね」

「うっ、はい」

周りからは「何やってんだよー羽織く」とか「羽織どうしたー！」とか色々言葉の雨が飛んでくる。これは、僕の悪い癖で一つの事を考え込むとずっと考えてしまうだ。前それで、2時間位悩んでた事を思い出す。

時間が経つのは早いもので時は既に放課後に。

「羽織さん、今日は一緒に勉強しませんか？」

「え？ 羽織今日は部活来ないのか？」

「羽織一緒に帰ろー」

そんなに、いつぱんに喋らないでくれ、僕は聖徳太子ではない。1人1人答えを返し

ていく。

「勉強はまた今度な須川<sup>すがわ</sup>」

「承知しました」

勉強大好き、須川はそう言い図書室の方へと向かっていた。図書室で勉強をするのだろう。須川は勉強を教えるのが上手い、そのおかげで僕は中間位に居れる。また、教えてもらうことにする。

次に――

「樹矢<sup>じゆもや</sup>俺は部活はやらない、前は人だが足りないって事でやったけれど、また機会があったら、やろうと思う」

「分かったよ、お前の運動能力は先輩も認めてるからな」

認められてるらしい、僕はただ運動が好きってだけなんだが、樹矢も同様にしよげた顔をし体育館の方へと向かって行く。して最後に――

「羽織?」

「まあ、帰り道は一緒だし、一緒に帰……」

僕は窓の方を見ながら承諾しようとすると思覚えの顔があった。

「あつ、結……」

「ん? どうしたの?」 羽織

「な、何でも無い悪い玲奈、今日は食材を買っていかなくて」

「なら、手伝うけど?」

「い、いや大丈夫だ、それに玲奈、今度漢字検定見たいのがあるんだろ? それに備えないと」

「それも... そうだけど」

「じゃ、じゃあそういう事で!」

僕は机に掛かっているバックを取り、急いで学校を出た。

学校を出ると僕が誕生日にプレゼントした。白いパークカーのフードを被り校門の近くにいた。

「ゆ、結? 何でここに?」

「.....」

結は何も言わず、僕の制服の袖を優しく握り誘導するように、歩いた。

僕は困惑状態。

「ねえ? 結どうしたの?」

「.....」

気がつけば、公園にいた。

日も沈み夕方だった。



「ゆ… い?」

「ひやおりの」

結からは大きな粒の涙がこぼれ、地面へと染みていく。

「どうしたの?」

と優しく抱きしめる。

「朝起きたら、は… おりが、居なくて…」

「僕は学校に」

「でも、きょうはあ、日曜日だよお…」

僕はポケットからスマホを取り出し確認すると、日付は日曜日だった。そうだ、今日は日曜日でも学校がある事を結に伝えて無かったんだ。

「ごめん、結…」

「やだあ、許さない」

結はまだ、泣いていた。

「どうしたら許してくれる?」

結は少し間を開け。

「キス… して」

その言葉を発す時はもう、泣いてはいなかった。

「分かった」

僕は1回抱きしている結を離し、近い距離で向き合う。

「じゃあ、い、いくよ」

結は何も言わずに、目を閉じていた。

僕は段々と近づいていく、結の息が荒いのを感じる。

さつきまで泣いていたのだからそれ位荒くなるのだろう。

そして僕は――

結の口の中に舌を入れ甘いキスをした。

「羽織」

綺麗で優しく包む声で僕の名前を呼んだ。

ツンツンしてない彼女よ声を聞くのはいつ以来だろうか？

「なんだい？」

「好きだよ!」

彼女が僕にこんな事を言うのは付き合ってから初めてのことだった。嬉しかった。誰に

言われるよりも嬉しかった。

そして、僕も返事をしなくてはならないとー

「僕も好きだよ」

## 5話 『彼女の苦手なものがまた増えましたあー!』

俺は今困っている。

何故ならー

「遊園地連れてってー! 行こ行こ行こー!」

駄々<sup>だだ</sup>をこねて、床でその言葉を連呼する。

もういい歳なんだから、我慢位しろ! ったく今日俺は学校で出された、レポートを書き上げなくては行けないのに、今日は日曜日そう、明日は学校、レポート提出は明日しなければならぬ。俺は机の上のノートパソコンを見つめながら、ため息を一つ。因みに莉音はレポートが終わっている。学校では頭がそこそいい、それになる事も早いのである。

「俺はレポートおわってねえんだよおおお!」

「私は終わった、だから行こ?」

顔を横に傾け、俺にうつつたいかけてける。

うつつ…… しょうがないか…… レポートは帰ってきてからすればいい。

「分かった、分かったよ行くよ……」

「やったー、達哉大好きー！　すぐ準備するね！」

時刻は、朝8時行くには、遅くないか。

言ったら、聞かないんだから、

「達也？　何笑ってるの？」

準備してきたという、莉音の姿は、正直可愛かった。

そう言う俺は特に着替えない。

「いや、何でもねーよ！　さあ、行くぞー！」

「了解ー！」

俺達2人はバスに乗り、近くの駅で降りた。

バスの中では、莉音は大人しく、俺の横に静かに座っていた。莉音は俺の前では甘えるが、人の前ではきちつとしている。家にいる時と別物だ。そうこうしている間に、駅のホームで待っていた俺達の前に、『ギユオオオオ』と言うキーブレーキの音をたてながら、電車は止まった。

「来たねー！」

「おう、そうだな」

電車の中に入ると、ずっと待っていて暑かったせいか、車内のクーラーが凄く気持ち良かった。

「す、涼しい!!」

「プツ…」

「笑ったあ! 達哉なんで笑ったのおお!？」

「いや、余りにも馬鹿みたいな顔で言うもんだからさ」

俺は手で口を抑えて笑った。莉音も膨らませていた頬つぺを笑顔に変え、笑ってくれた。やっぱり、莉音と居ると、嫌な事も忘れられる。

「さーてと」

「??」

俺はバックからノートパソコンを取り出し、膝の上に置き、レポートの続きを書き始める。莉音は「暇だよー!」と小声で俺の耳元で呟くが、無視し書き続ける。

莉音も珍しく諦め、横で大人しくしていた。

よしよし、いい子だ。と思いながら、カタカタと手を動かす。

「ふう〜、一通り終わった」

駅は終点に着こうとしていた。

「おい、起きろ、莉音」

「っひ? はああ〜」

大きなあくびをし、目をパチパチとさせる。  
起きたようだ。

「もう、着くぞ?」

「……………」

どうしたのだろうか?…………… そう言えば、寝起きは気分が悪いんだっけ……………

「莉音?」

「何?」

反応が冷たい、ここまで人は冷たくなれるのか……………

ううつ…………… ここからどうしようか?

「遊園地着いたらどうする? 飯食べるか?」

数秒立ち、莉音は口を開いた。

「ジェットコースター乗りたい!!」

良かった。機嫌は直ったみたいだ。いや、最初から機嫌は損ねてなかったのかもかもしれないな。

「そうか、莉音はジェットコースターとか乗れるんだな」

「え? 乗ったこと無いよ? そもそも、遊園地行ったことないか」

! ? その言葉を聞き少し驚いていた。そして、すぐに切り替えた。

「じゃあ、今日は沢山遊ぼう、思い出とかもさ」

「うん!」

電車を降りて、専用バスに乗って30分経った頃。

「やつと、着いたね!」

「そうだな」

俺達は、パスを買い大きい門をくぐり抜け、一つ目の乗り物ジェットコースターを指して歩き始めた。

「うわぁく色々な乗り物があるよ!」

「そうだな」

無邪気だな、それにしても周囲の人達の視線を浴びている気がする。いや、正確に言うとうと莉音に視線が。あ、そうか、莉音の病院の事をすっかり忘れていた。

俺は被っていた、黒い帽子を莉音に被らせ耳を隠した。

奇跡的に尻尾は、アクセサリーか何かと思ってるようだ。

「あ、ありがとう」

「あ、おう、」

「うわく、ジェットコースター! 凄い! 凄いよ達哉!」



「そうだな」

正直言つて、俺はジェットコースターが苦手だ。

だつて、あれ気持ち悪くなる

「じゃあ、行こうか！ 達哉」

狂気しか感じられない。

「俺はいいよ、莉音1人で行つてこいって」

「達哉も一緒じゃないとやだー」

と俺の腕を引っ張つて無理やり連れていく。

「何名で？」

「え、いや、俺は…」

「2人でお願ひします！」

「はいッ！」

俺達は一番前の席に乗つた。怖い、怖い、怖い。

「楽しみだね！ 達哉！」

「そう… だな」

楽しいないと、こうゆう時だからこそ、それに笑顔なんだから、答えてあげないと…

「では、出発しまーすー!」

係の人の声と同時に発車した。ただいま、登っています。  
数分もすればー

「落ちる」

落ちるつてええええー

「ふん、ふんふん」

今すぐ逃げ出したい。俺は逃げようと躡く。

「な、何してるの? 達哉?」

「いや……」

俺は半分泣いていた。

「落ちるよ! 達哉!!」

そして……

「キャー……」

他の人や莉音は声を出し、楽しんでいた。

俺はと言うと……

終わるまで気絶していました。

係の人に起こされ、俺は恥を書きながらジェットコースターを降りたのであった。

「いや〜楽しかったね！ 達哉！ また、乗ろうね！ 最後にも」

「勘弁してくれえ〜」

俺は、丁度あった、ベンチに座り少し休憩をする。

太陽は体力を削るかのように、暑かった。

「えー！ 休まないでよっ！ 次行こう！ 次！」

凄く元気だ。こんな、元気なの久しぶりに見たかも知れない。

「分かったよ、で？ 次はなに乗るんだ？」

「あれ！」

と指さしたのは、メリーゴーランドだった。

これなら、いいだろ。俺でも乗れるし、何よりコストの低い乗り物だ。

係のお姉さんのところまで行き。

「では、どうぞ〜」

莉音は、すぐに乗り、シートベルトをした。俺も莉音の隣に乗り、アトラクションがスタートするのを待った。

「間もなく、始まります」

「始まるって」

「そうだな」

やっと、落ち着けそうだ。

ガタンと音を立て、動き出す。

「どうだ？ 莉音？」

「……………」

「莉音？」

もしかして、これだけだからつまらないのかな？ ジェットコースターの後だからな。

この後もアトラクションが終わるまで、一言も喋らなかつた。メリーゴーランドを降り、莉音に話しかける。

「りお……………」

「恐かつたよ…………… 達哉」

と泣いていた。おいおい、どうした。

「どうしたんだ？ 何か悪い事でもあつたか？」

俺は、そつとベンチに座らせる。

「めりー…………… ひつく…………… ごおらんど…………… うつ…………… こわかつた」

えー、何でそうなつた。

「上下に動いてて、何回も同じい所回ってて」

俺は取り合えずそっと抱きしめ、よしよしとする。

莉音の怖いツボはよく分からないが、また一苦手なもの？

怖いものが増えた。

## 6話 『帰宅』

「少しは落ち着いたか？」

「うん、飲み物飲んだらだいぶ楽になった」

「それは良かった」

まさか、コーヒーカーップで酔うとは、初めて見た。

ジェットコースターに乗れるつてのに、基準がわからない。

「じゃあ、次行こ!!」

「体が大丈夫ならな」

「全然大丈夫っ!」

本当だろうか・・・また、倒れられても困るし、まだ休めようか。でも、遊園地は初めてだつてはしやいでるし、もっと回ろうか? とも思ったけれど。

「には、見えなそうだ・・・」

「大丈夫だもん! その代わりにちゃんと・・・たて・・・るし・・・」

ふらふらだ。

これじゃ何のアトラクションも乗せてあげられないな。

仕方ない。

「莉音・・・無理しても何もいいことはないぞ、少し休もうな？」

「大丈夫なのに・・・」

言う事を聞いてくれた莉音はベンチへと座る。

そろそろ薬の時間だな。

「莉音、薬の時間だね」

「ええ、やだ・・・。飲ませて？」

「飲ませてじゃないよ!!! それは流石にやばい。ここで・・・」

顔は見えてはいないが多分赤面状態なのだろう頬の温度で分かる。

「飲ませてってそういう訳じゃなくて、抵抗できないから薬を口の中に入れて欲しいっ

て意味なんだけど・・・」

.....。

「そっだよな!」

何を勘違いしてるんだか。

俺は薬をバツクの中から取り出して莉音の口の中に放り込み水をゆつくりと飲ませ

て上げる。

ゴクンツと目を瞑りながら飲んでいる姿はとても可愛かった。

「何?」

「なんでもないよ……。さ!次!次行こうぜ!」

「う、うん」

◇

あああああああー!疲れた。凄く疲れた。いや、楽しかったけどさ。莉音といる時間はすごく楽しかった。

「じゃあ、帰るか……」

「そうだね、今日はありがとう達哉」

「別にいいさ、また来ような!」

莉音は少し照れくさそうに頷き手を繋いで一緒に帰った。

「帰ってきたねー!」

家に帰ってきた時間帯は夜中の2時頃。正直早く寝たい気もするが俺はまだ、レポートが残っているのだ。

「さて、俺はこれからレポートを仕上げちゃうから先寝てていいぞ」



「じゃあ、お言葉に甘えて眠らせて貰うね！おやすみ達哉〜」

「おう。おやすみ、ゆっくり休めよ」

「分かってるよ」

それから俺は約1時間辺りノートパソコンと睨めっこをしレポートを仕上げた。腕を伸ばし、あくびをする。布団について早く寝よう。

俺は、莉音のいる部屋へと行きぐっすりと寝た。

ーレポートー 愛真 達哉

【毛耳動物人間細胞障】について、この病気はいきなり発症した障害だと思われます。最近調べていて分かったことを今回はまとめたと思います。毛耳動物人間細胞障はあゝ一部の細胞配列が代わり動物の細胞を取り入れた事から症状が現れました。今回は毛耳動物人間細胞障の発生と思われる事を見つけました。それは、何かしらの細胞が死にその細胞からある何か生まれこの細胞が出来上がったと見ています。

そして、対象方法は今のところありません。

これで僕のレポートを終了します。

## 7話 『出会い』

「ねむーい！」

「まあな、昨日の帰り時間が遅かったしな」

「なんであんなに遅く帰ってきたの!？」

「そりゃあ、仕方ないだろう。楽しかったんだから」

実際楽しかったし、その代償にしてはこの眠さはいいんじゃないかな。

「まあ、そうだよね・・・楽しかったし・・・」

眠そうにあくびをする。今僕達は、図書館にいる。

理由は簡単だ、動物について調べるためだ。うーん、正確的に言うなら動物と人間の構造の違いとか?を調べるため(?)かな。

「さーて!読も・・・」

「にしてもこんなに早く来なくなったって良かったでしょ・・・。寝ちやそうだよ・・・」

「仕方ないだろ・・・?夜は色々と用があるんだから」

「う・・・」

唸りながら仕方なく莉音は短編の小説を持ってくると読み出す。さっきの眠気とや

らはどこに行つたんだ？

「俺も読み始めるかな・・・」



「どこに行くの？今日は！」

「図書館だよ、調べ事がしたくてね」

して、この2人も図書館に向かうのであった。

図書館の中は暑苦しい外とは比べてクーラーもガンガン聞いておりとてもいもちが  
良い。

「羽織く。涼しいね」

「そうだね、気持ちがいいね」

感想をお互い言い合い席をみつようとす。

すると、2人のカップル(?)らしき人達を見つける。

その人達は、普通のカップルと全く違う点がある。

それは、彼女の方が『毛耳動物人間細胞障』だという事だ。因みに、僕の彼女もそ  
うなので仲良くできたらしいな。

そういうこともあってか、向かいの席に座らせてもらった。結は人をあまり好まない

が同じい人間の人がいれば少しは気が楽になるだろう。

「こんにちは」

本に夢中になる彼に話をかけてみる。

「あ、えーつと・・・こんちわ」

いきなり挨拶したからか戸惑い挨拶が一瞬戸惑う。

この人は人間と動物の本ばかり読んでいる。もしかして、この人は彼女の病気を治すために色々調べてたりするのか？

「そちらは、君の彼女さん？」

「そうですか？何か？」

彼の「何か？」には、力を感じた。

と云うか、睨まれてしまった。怖い・・・。特に、彼女を馬鹿にするという訳では無いんだけど・・・。

「ーその僕の彼女もさ一緒だからさ、君の考えていることと僕の考えていること一緒かなって？思っちゃってね？」

「ああ、そうだったんですか・・・。申し訳ないです、勘違いしてました。そうですね、多分俺と貴方が考えること一緒だと思いますよ」

すると、しつかりと弁解するように言ってくれた。

悪い人ではなさそう。

「達哉……？」

ふと、あちらさんの彼女は椅子を近づけ服に隠れるかのように顔を隠した。結はなにを聞いたんだろうか？

「ど、どうした？この人達は少なくとも俺達を理解してくれる人だと思うぞ」

「そうだとは思うけどさ……やつぱり……怖い……」

今にも泣きそう。結よりか弱い子はいたんだなと思う。

「あ、そうだ僕羽織って言います。こっちは結」

「あ、ああ。俺は達哉、こっちでうずくまってるのは莉音……普段はこんな風じゃないんだけどな」

そう言う達哉君は莉音ちゃんの頭をさすりよしよしとするかのように頭をさする。

「所で羽織さんは……失礼に当たるとは思っているんですが……どうして結さんと？」

「さんだなんて……羽織でいいよ。そうだね、結とは一目惚れだったんだよね。まあ、あとは事情があつてね」

「そうなんですか……お互い様ですね……」

達哉君はそう言う莉音ちゃんを説得し始めた。

悪い人ではなさそうなのがホッした。

こうして僕達の出会いが後後重要な事に繋がっていった。

## 2章 私の事好き？

### 8話 『会話』

「おじゃましまーす」

「どうぞ、上がって、上がって」

俺は今羽織さんの家にお邪魔している。

今日は交流でも深めないか？という話になり俺達は羽織さんの家に来ていた。意外だったのは俺と一緒に二人暮しをしいてる所だ。

こちらもイチャラブしてだな。

「結構綺麗なんすね」

「ははは・・・。掃除はしつかりするからね」

頬を少しポリポリとかき笑いながら言う。

俺も失礼な質問をしてしまっただろうか？

「羽織ー！」

「お、おわっ・・・」

寝起きかと思われる結さんが羽織さんに抱きつく。

なんだろう・・・なんら俺達と変わらないんだけど・・・。

「ゆ、結。お客さんが来ているんだから・・・。」

「関係ない！」

すると、再び顔を羽織さんにうずめた。

「とりあはず座って、座って」

「はい、ありがとうございます」

俺と莉音近くにあつた机の前に座る。

莉音は俺から離れようとせず、俺の服を少し持ちながら俺の後ろで隠れるように座っている。

確かに、莉音は人見知りと言うか・・・。人をあまり信じようとしなからな。俺だって人は莉音以外は嫌いだけど羽織さんと結さんは俺達と一緒に考えれば嫌いにはなれない。むしろ、こういう人達とは仲良くなっておいた方がいい。

「すみません・・・交流するって何をすれば・・・？」

「そうだね・・・。交流って言ったって何を話せばいいか分からないよね」

僕はバックからノートパソコンを取り出し、羽織さんに見せた。

「これを、見てください」

そう言って羽織さんに見せたのは『毛耳動物人間細胞障』に関するデータ。



「これは・・・!!」

「そうです。僕が調べた限りの『毛耳動物人間細胞障に關』するデータです。対処方法はまだ見いだせていませんが・・・。きつかけやどのような現象が起きる等はまとめておきました。もしかしたら、結さんに何かがあつた時に使えるかな・・・と」

「ありがとう・・・!嬉しいよ、僕が調べた資料はあまりにも少なかったからね」

そう言うと、羽織さんは自分のノートパソコンを取り出しす。そして、コピーの資料を渡す。

「それ何?」

結さんがノートパソコンを指さしながら言う。

莉音は結さんを見て少しビクビクしていた。

莉音は昔数少ないこの障害を持った友達に虐められそれから、同類の人間でも恐るようになって。

まあ、結さんは悪い人ではなさそうだけどね・・・。

「ああ、これ? これはね、結の病気を治すための大事な情報だよ。それがこの人、達哉君がくれたんだ」

「ありがとう達哉!!」

「いや・・・いいって。救える人は救いたいからね・・・」

実際莉音だけを助けても意味は無いしな、この障害にかかっている人全員を救いたいと考えているしサンプルは多い方がいい。

「とりあはず話しませんか？ お互いについて、お互いのことについて・・・」

「その案は否定しないけど・・・？」

それから僕達は自分たちの恋愛事情など特性について話し合ったりした、話のほとんどが『毛耳動物人間細胞障』

の事についてだった気がするが関係ないか。

◇

「今日は色々楽しかったよ」

「俺も楽しかったんですけど・・・また今度話しましょう」

「うん」

それから、羽織さんの家を離れた。

家を離れると莉音はどうとう口を開いた。

「ねえ、達哉・・・」

「ん？どうしたんだ？」

莉音は下を俯きながら俺に怖そうな声で言ってきた。

「あの子・・・あの結って子はね・・・」

「昔私をいじめてた子なんだ・・・」